

メタ言語としての「丁寧」と“polite”

鶴田庸子

1. はじめに

日本語習得のための一般的なコースで、「丁寧」は初級段階から導入される語の1つである。「丁寧」の意味には大別して次の2つがあると考えられる。1つは「丁寧にお礼を言う」「丁寧なことば」といった使い方に見られるような、対人的行動やその手段である言語の性質を描写するもの、他は「壊れやすい品なので丁寧に扱おう」「丁寧なピッチングで相手打線を抑えた」のような、非対人的行動の性質、あるいは行動の非対人的側面を描写するものである。このうち初級レベルの日本語教育で導入されるのはもっぱら前者の意味であることが多い。本稿で取り上げるのも前者の意味で使われる範囲での「丁寧」である。¹

この「丁寧」は、ある表現形式（語彙や文法形式）について、別の表現形式と比べてより丁寧である、あるいは、そうした形式を使うことは後者の形式を使うより丁寧な言語行動である、というような記述をそれらの形式の性質や用法の説明として日本語学習の場で学習者に提示すること、そして、それ以外の場面で学習者が言語や言語行動を記述することを可能にする役割を担っている。その意味で、「丁寧」は言語や言語行動を記述するための道具、つまりメタ言語として導入される表現とみることができる。

しかし、「丁寧」はメタ言語として導入される他の多くの用語と次の点で異なる。メタ言語はしばしば、それが指すものの範囲が明確に（あるいはある程度明確に）定義づけられた technical term²である。「形容詞」「連体修飾」

*1 ただし、この2つの意味は必ずしも明快に区別できるものではなく、また、多くの場合、日本語話者が両者の区別を意識しているということもできないことは念頭においておかななくてはならないだろう。

*2 “technical term”は一般に「専門用語」と訳され、あるいは「テクニカルターム」という表記で日本語の語彙の一部となっているが、「専門用語」も「テクニカルターム」も必ずしも明確に定義された用語を指すものでない（『広辞苑』などによる）点で、原語と異なるようである。本稿では、明確な定義をもつ表現とそうでない表現との違いに焦点を当てていくので、混乱を避けるために原語“technical term”を用いることにする。

「縮約形」のように、主に国文法の領域で定義とともに使われる technical term が日本語教育においてもその定義を踏襲しつつ導入されている場合が多い。一方、「丁寧」は国文法、社会言語学、ポライトネス理論研究といった領域でもメタ言語として使われるが、複数の異なる概念を指す用語として使われたり、³十分に明確な定義なしに使われたりしており、その意味で technical term と呼べるかどうか疑問である。日本語教育においても、「丁寧」が使われるときにその意味が明確に定義されることはないようである。このように、「丁寧」はメタ言語的役割をもつものとして導入されるが、専門分野での議論のために定義を与えられたものではない表現、すなわち folk term があらためて明確な定義づけをされることなくそのままメタ言語として使われている表現であるといえる。

「丁寧」の導入に際しては、定義を与える代わりに媒介語が使われることがある。そして、媒介語が英語の場合は“polite”と対応づけられるのが一般的である。ここで興味深いのは、“polite”も「丁寧」と同様にメタ言語としてポライトネス理論研究で使われている語であり、しかも、しばしば英語の folk term があらためて定義されることなくそのまま使われる点である (Lakoff, 1973、Fraser, 1975、Brown and Levinson, 1978/1987、Hill, et al., 1986、など)。この意味でも「丁寧」は他の多くのメタ言語と異なっている。例えば「形容詞」の場合を見ると、それ自体が technical term であるのみならず、それに英語を対応させる場合は、やはり technical term である“adjective”が選ばれるのが一般的であり、「形容詞」以外のケースを見わたしても、対応語はもともと英語にある technical term、ないしは訳語として新たに作った表現 (例えば「形容動詞」の訳語“na-adjective”) であって、folk term でない場合が多い。

日本語教育に携わる者の多くが経験的に知っているように、日本語の表現 X が表す意味を過不足なく指すことのできる外国語の表現 Y など、technical term でない限り存在しないと考えたほうがよい中で、メタ言語であればその多くが technical term であるために日本語と 1 対 1 の対応関係にある訳語が存在することが多く、一般論として、メタ言語には日本語の X とぴったり一致する意味をもつ外国語の表現 Y が存在することを期待できることがある。しか

*3 例えば、「来ルと言うよりイラツシャルと言うほうが丁寧だ」と「来ルと言うより参ルと言うほうが丁寧だ」と「来ルより参ルのほうが丁寧な語だ」はいずれもふつうに行われる使い方であると考えられるが、それぞれの使い方で「丁寧」の指す概念は同じでない。

し、上に述べたように「丁寧」は例外で、メタ言語であるにもかかわらず folk term がそのまま（つまり、定義されることなく）使われており、意味の範囲の点で過不足なく対応する英語の表現Yはない。

「丁寧」をメタ言語として導入する目的の中に、学習者が日本語を使うときに対人的に不適切な行動をそれと知らずにとってしまうのを防ぐということが含まれているなら、「丁寧」の対応語として広く使われている“polite”について、どの程度信頼できる訳語なのかを知っておく必要があると考える。本稿は「丁寧」と“polite”のそれぞれが指す意味が相互にどのように重なりどのように異なるかを考察する試みである。

2. 「丁寧」と“polite”の意味範囲についての調査

英語話者の学習者から、大皿に並べたケーキから好きなものを選ぶように勧められたときに一番大きいものを取るの「丁寧じゃないことですか」といった質問を受けることがある。それが対人的行動の適切性についての質問であることは容易に理解できるが、「丁寧でない」という表現の使用に多少の違和感を覚える。そこで、対人的・社会的に不適切な行動のどの範囲を日本語で「丁寧でない行動」、英語で“politeでない行動」とそれぞれ呼び得るのかを調べるために2つのアンケート調査を行った。

2.1 調査1：「politeでない」行動

英語母語話者を対象に「politeな人ならまずしないようなこと」を思い浮かばせてもらう小規模アンケートを行った。英国南部の大学町で大学教職員20人に質問紙を配布し、14人から回答を得、その中の英語を母語とする13人（英語の変種の分布は、英国10・米国2・南アフリカ1）の回答を集計した。

回答からは様々なレベルで分類され（その1例に2.2節でふれる）、列挙された185項目が得られた。それらは行動の種類の点でもそれから受ける印象の点でも多岐にわたるものである。そのすべてをここに示すことはできないので、“polite”と「丁寧」との意味範囲の比較という調査目的に照らして妥当と考えられる方法として、それぞれの行動を、それから筆者が感じる不適切さのタイプによって17のカテゴリーに分類し、代表的なものを数項目ずつ示したのが表1である。項目の分類は厳密な基準によるものではなく、その多様さを例示するための便宜的なものである。

表1 「politeでない」行動の例

身なりがだらしない	穴のあいたストッキングを穿いている、ズボンからシャツの裾が出たままにしている
がさつ、荒っぽい	いわゆる「きたない」ことばを使って話す、濡れた傘を持って部屋に入る、大きな声で話す
はしたない	酒に酔う、酔って吐く
特定のエチケットを知らない	音楽会で第1楽章の終わりに拍手する
厚かましい	ケーキを勧められて一番大きいのを取る、勧めがないのにお代わりを要求する、親しくない人に金を借りようとする、自分が支払わない場面でたくさん食べる
行儀が悪い	口を閉じずにものを食べる、人前でゲップをする、口に食べ物が入っているままで話す
ルーズ	遅刻する、返却期限を守らない
対人的な場面での礼儀を知らない	挨拶をしない、お礼を言わない、謝らない、ものを受け取る時にひったくように取る、親しくない人になれなれしく話す、相手の前であくびをする
短気・大人気ない	侮辱されたときに（受け流さず）反応してしまう、重要でないことについて人前で怒る、愚痴をこぼす
周囲の人々の迷惑を考えない	自分のペットや子供が他人に迷惑をかけても注意しない、大音量で音楽を鳴らす、公共の場にごみを捨てる
人に対して配慮がない	深夜に電話する、人の話を聞かず自分ばかり話す、その場にいる誰かが話に加われなくなる話題を持ち出す、開けたドアを（後ろの人のために）押さええない
いやらしい	親しくない人に性に関する話をする、人前で裸になる
ずるい	ゲームでインチキをする、列に割り込む、試験でカンニングをする
低俗・倫理に反する	人の噂をする、他人の手紙・日記を読む、他人の重要でないクセを話題にする

差別的	障害者・老人・女性などをばかにする
押しつけがましい・傲慢	意見や要求を押しつける、命令口調で言う、求められていないのに助言をする
攻撃的	相手を公然と侮辱する、相手が傷つくようなことを婉曲でない言い方で言う

2.2 調査2：「丁寧でない」行動

調査1で挙げられた行動には「丁寧でない行動」という表現から想起する行動の範囲を越えたものも含まれるように見える。そこで、英語母語話者が「politeでない行動」と呼び得る不適切行動のうちどの範囲を日本語母語話者が「丁寧でない行動」と呼び得るかを調べるために、上の項目からいくつかを選んで日本語母語話者に示し、それぞれの行動について、それをするよりしないほうが「丁寧である」と言えるかどうかを尋ねた。(項目によっては、日本(語)の事情に合わせて場面が具体的に思い浮かぶように修正して記述した。付録2の質問紙参照)。首都圏⁴在住で日本語を母語とする大学生男女(18～28歳：平均21.8歳)355人を対象にアンケート調査を行い、350人から回答を得た。

提示した不適切行動を、「それをするよりしないほうが丁寧である」と言えると答えた回答者の割合(%)が高かったものから順に並べたのが表2である。

表2 「politeでない」行動の「丁寧でない行動」と呼べる度合い

渡したものをひったくように取る	85.9
友達に手伝ってもらおうとき「手伝って」と言う(「悪いけど」をつけずに)	83.4
同僚に「コーヒーいれなさいよ」と言う	80.2
初めて会った人になれなれしく話す	77.3
人に手伝ってもらって、お礼を言わない	73.1
常に「がき」「でかい」「食う」を使う	69.1
あなたが挨拶したとき、聞こえているのに答えない	56.6
借りたカメラに傷をつけたとき、謝らない	49.0

*4 埼玉県、東京都、千葉県および神奈川県を含む地域。

口に食べ物が入ったままでしゃべる	47.7
視覚障害者のことを常に「めくら」と言ってばかりにする	46.1
人との会話の最中にあくびをする	44.9
親しくない人に夜中の1時に電話する	35.8
駅やレジで、列に割り込む	35.5
他人の日記を読む	31.0
自分の子供が他人に迷惑をかけたとき、放っておく	29.8
親しくない人との会話でセックスを話題にする	26.9
腹が立つと、人前でものしることを言う	25.2
かげで他人の悪口を言う	24.7
試験でカンニングをする	23.7
ケーキを勧められて一番大きいのを取る	18.1
穴のあいたストッキングを穿いている	16.0

3. 考察

2つの調査の結果から、英語と日本語で「politeでない行動」「丁寧でない行動」とそれぞれ呼べる行動の範囲、したがって「丁寧」と“polite”という語の指す意味の範囲に、違いがあることが見えてくる。また、不適切行動の例として調査で使った行動の不適切さの質を詳しく検討すると、この2つの folk term には、それが指す意味の質的多様性の面で共通点と相違点があることも見えてくる。

3.1 “polite”の一部は「丁寧」からはみ出す

「politeでない」行動の中には、「丁寧でない」と言えるとする人が25パーセントに満たない行動も含まれる。したがって、“polite”が指す意味には、大部分の人が「丁寧」を使って指す範囲の意味以外のものも含まれるといえる。

このことはまず、学習者が「一番大きいケーキを取るの丁寧ではない」のような発話を行うことの説明を示唆する。学習者が「丁寧」の意味を“polite”という媒介語の意味から類推していれば、母語話者が一般に「丁

丁寧」を使って指すことをしない範囲の意味をも指して「丁寧」を使うことは、当然起きる結果といえる。

次に、学習者の「一番大きいケーキを取ることは丁寧でない行動か」という質問に対して教師が、そうしないほうが対人的に適切な行動であるということ伝えるために「小さめを取るほうが丁寧だ」と言うとする、と、「丁寧」というメタ言語を母語話者の一般的な用法ではなく学習者の中間言語の用法で使うという一種のアコモデーション⁵行動を行っていることになることが分かる。

3.2 「丁寧」も“polite”も多義的

多くの人が「丁寧でない」と呼ぶとした行動はどれも対人的社会的に不適切な行動であるという共通点をもつが、その不適切さは一様ではない。例えば、「悪いけど手伝って」と頼むのと比べると「手伝って」とだけ言って頼むのは「丁寧でない」。そして、習慣的に「がき」などを使うことは「子供」を使うよりやはり「丁寧でない」。しかし、ここで同じ「丁寧でない」という表現で描写される印象は同じものだろうか。依頼に「悪いけど」をつけないのは、自分が相手に負担をかけることの認識を伝えないという点で不適切な行動であり、あえて別の表現を使うとすれば「横柄」「命令的」などと言い表せる印象だろう。一方、常に「がき」などを使うことから受ける印象はこれと異なり、「荒っぽい」、あるいは「場面のあらたまり度に関する認識が足りない」などだろう。さらに、ものをひったくように受け取るのは、そのどちらとも違った印象だと考えられる。このように「丁寧でない」は、行動が与える多様な対人的・社会的印象を区別せずに指し示す表現であるといえる。

同じことは「politeでない」についてもいえる。「politeでない」行動が与える印象は様々であり、それらが英語話者にとって区別可能な異なった印象であることは、区別するための別の表現が多数あるということから明らかである。例えば、人を傷つける感じを表す“offensive”、他者への配慮不足の感じを表す“inconsiderate”、相手の意向を無視して勝手に決めてしまう感じの“presumptuous”などである。(実際、調査1の回答の1つには、「politeでない」行動の1つの分類として“presumption”(傲慢な決めつけ)が挙げられていた。)このように、「丁寧でない」も「politeでない」も区別可能な多様な

*5 Accommodation (Giles, 1980)。「応化」。やりとりの相手の言語使用に応じて自らの言語使用を調整する現象。ここでのケースのような、話し相手が非母語話者である場合のものは「フォーリナートーク」(foreigner talk)とも呼ぶ。

意味を区別せずに指す表現である。

したがって、ある行動について「丁寧でない」と説明したときに、学習者は、不適切な行動だから相手と良好な関係を保つためにはとらないほうがよさそうだということは了解できても、その不適切さが「丁寧でない」および「politeでない」が表し得る様々な意味のうちのどれなのかは理解できない可能性が十分ある。もちろん状況から容易に想像がつくことも多くあり（例えば、「大きいケーキ」の例はその可能性が高そうである）、その場合は問題なく適切な理解が成立するだろう。しかし、類推が難しい場合もあり得る。例えば、「デス/マスを使うと丁寧になる、使わないと丁寧でない」という説明を聞いても、その「丁寧でない」の意味が「横柄、命令的」なのか「場面のあらたまり度に関する認識が足りない」なのか、「他者への配慮不足を感じさせる」のかなどは判断できないおそれがある。特に、学習者の母語や既習外国語に日本語と同じ程度に形態的に複雑な敬語体系がない場合、敬語の形態的複雑さに目を奪われて、英語やその他の言語文化でも音声・統語といった別の装置を使って日本語の敬語によって伝えるのと類似の「丁寧さ」を伝達していることに気づかず、類推ができない可能性は高いかもしれない。

日本語教育が学習者に提供している説明は、この部分でこのように不明確で不親切なものである。「丁寧」も“polite”もあまりに曖昧な用語であるといわざるをえない。不適切さをよりの確に指すことのできる別の用語を使うことを考えてみる必要があるだろう。

3.3 「politeでない」の一部は「丁寧でない」より深刻

「politeでない」の指す不適切さが一様でないことはまた、不適切さの深刻さの度合いの点でも指摘できる。例えば、「はしたない」「特定のエチケットを知らない」と言い表せる印象と比べて、「ずるい」「倫理に反する」などの印象は、単に経験や知識の不足からマナーを知らないのだろうと思わせるのではなくその人の人格や倫理観に疑問を抱かせるものだという意味で、より深刻なタイプの不適切さであるといえるだろう。

そして日本語教育にとって重要なのは、「politeでない行動」と呼ばれるが「丁寧でない行動」とは一般に呼ばないものの中にそうした、より深刻なタイプの不適切さを感じさせそうな行動が含まれているという点である。例えば「悪口を言う」「カンニングをする」である。この2つの行動のように、日本語では一般に「丁寧さ」が不足した行動と捉えないが、英語では「politeさ」

が欠如した行動と捉え得る行動があるということである。

このことから、3.2で述べたことはさらに重大な問題ををはらむ可能性があることが分かる。「丁寧でない」の意味を「politeでない」を介して理解する場合、例えば、デス・マスを使わないと人格や倫理観を疑われてしまう、というように、日本語教師が「丁寧でない」で伝えようとしているよりはるかに深刻な意味に解釈する学習者がいるかもしれない。

現実には、初対面の人との会話で尊敬語・謙譲語を使わなければ相手をひどく侮辱することになると思っていた、と述懐する学習者にひとりならず遭遇した経験が筆者にはある。また、尊敬語・謙譲語を奇妙なほど多用しようとする学習者に会うことがあるが、そのような学習者の中にも同様の思いからそうしている人がある可能性がある。そうであれば、現行の教え方は事実を十分に正確に教えることに失敗しているといえる。また、敬語を使わなくても人格を疑われるほど深刻な不適切さを生じるわけではないと知らされていれば敬語習得にそれほど執着しなかった学習者を、事実と異なる情報によってそれに駆り立てるとしたら、フェアな教育とはいえない。

以上のように、「丁寧」をその意味を“polite”という対応語の意味に依存して導入するのは、多義的であるために意味の不明確な語をもう1つの多義的で不明確な語に対応づけることを学習者にさせることである。学習者が発信者あるいは受信者としてそれを使って行うコミュニケーションでは、喩えていうなら「伝言ゲーム」の最下位チームの結末のように、意味は相乗的にずれてしまう可能性があると考えなくてはならない。

4. 言語間比較研究における“polite”の使われ方

以上、「丁寧でない」行動と「politeでない」行動との間に無視できない違いがあることを述べた。しかし、ここで同時に注意しなければならないことは、以上の議論が、对人的に不適切な行動をとることを避けようと思ったときにどのようなことに注意しなければならないかという点で日本語文化と英語文化との間に違いがあると主張するものではないということである。「politeでない」行動のうち「丁寧でない」とは一般に言わない行動（つまり、表2で下位に位置する行動）が日本語話者にとっても人を不愉快にし、对人的・社会的に不適切なものであることは、直観的に明白だろう。また、日本語母語話者に他人の言語行動のうち不愉快に感じるものを挙げてもらうと、「先輩と話す

ときに丁寧なことばを使わない」のようなものより「悪口」や「批判」といった発話の内容が他人を傷つける性質のものである行動や、「人の欠点をすげすげ言う」のような、そうした内容の発話でそのことに対する配慮をしそねた行動のほうが、挙げる人の数も挙げられる行動の数も多いことが筆者の別の調査で分かっているが、そうした行動から受ける不愉快さを描写するときに母語話者たちが使うのは「丁寧でない」ではなく、「図々しい」「偉そう」「冷たい」「思いやりがない」「頭ごなし」「人間性を疑いたくなるような」といったさまざまな別の表現である (Tsuruta, 1998、鶴田2002)。このように、両言語の「丁寧でない」と「politeでない」という表現がそれぞれどんな範囲の行動を指すかということは、両文化でどんな行動が対人的に重大なダメージを与えるかということと別のことである。

したがって、学習者が背景にもつさまざまな言語文化と日本語文化との間で、どのような行動が対人的社会的に適切なものとみなされるかという点で違いがあるのか、あるとすればどのような違いなのか、という日本語教育にとって重要な知見を得ようとするときに、「丁寧な」行動と“polite”な行動とを比較してもあまり意味のある結果は期待できない。ところが、ポライトネス理論研究の分野で行われている言語文化間比較研究では、それに類する比較が見られる。例えば、Gu (1990) は西洋社会と中国文化の“politeness”の概念を比較するとする議論で「politeness に最も近い中国語は polite appearance を意味する limao (禮貌) という表現である」(Gu 1990:238) として両者の比較を行っている。また、Nwoye (1992) は、ナイジェリアの Igbo文化における“politeness”は西洋社会におけるそれとは異なるものであり、Brown and Levinson (1978/1987) が普遍的に言語行動を説明できるとするモデルでは説明ができないと主張するが、Nwoye が西洋社会の“politeness”と比較しているのは「文字通りには good behaviour を意味する ezigbo omune」(Nwoye 1992:310) である。西洋文化と中国文化あるいは Igbo文化とを比較して異同を論じるこれらの試みで、本当に比較すべきものが比較されているのだろうか。もともと異なっていて比べる意味のないもの同士を比べて、両者は違うものだと言っているということはないのだろうか。この2例のような議論の進め方の場合、それぞれの言語に習熟していない筆者のような読者は判断するすべがないが、比べるのが妥当な対応関係にあるものであることの根拠が示されていない以上、その可能性がないとはいいきれない。

このようなわかりにくい議論が行われることを可能にしている要因の1つ

に、ポライトネス理論研究においてその超基本的ともいえる概念を指す用語に folk term である “polite(ness)” がそのまま充てられて明確な定義が与えられていない場合が多い⁶ことと、ポライトネスの言語間比較において定義のない訳語を対応させていることがあることは明らかであろう。

本稿で取り上げた、用語を定義せずに使うことが原因で生じている不明確さは、このように、ひとり日本語教育だけに見られるものではなく、ポライトネス理論研究での議論にも共通する問題である。しかし、理論研究と違って、日本語教育では不明確さが原因で人が実害を被る可能性がある。日本語でコミュニケーションを行うときに何か対人的・社会的に適切な行動であるのかに関する事実を学習者が誤解することなく効率よく理解するのを妨げる可能性をもつこの問題を、日本語教師としては看過するわけにいかない。

参考文献

- 鶴田庸子 (2002) 「敬語を使うことで伝わる『丁寧さ』と日本語教育」
The Language Teacher 26号(1). 全国語学教育学会
- Brown, P. and Levinson, C.S. (1978) Universals in language usage: politeness phenomena. In Goody, E.N. (ed.), *Questions and politeness: strategies in social interaction*. Cambridge University Press, pp. 56-289
- (1987) *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Fraser, B. (1975) The concept of politeness. Paper presented at the 1985 NWAVE Meeting. Georgetown University.
- Giles, H. (1980) Accommodation theory: some new directions. *York Papers in Linguistics* 9, pp. 105-136.
- Gu, Y. (1990) Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics* 14, pp. 237-257.
- Hill, B., Ide, S., Ikuta, S., Kawasaki, A. and Ogino, T. (1986) Universals of linguistic politeness: quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics* 10, pp. 347-371.
- Lakoff, R. (1973) The logic of politeness: or minding your p's and q's. In C. Corum et al. (eds.), *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*. Chicago Linguistic Society, pp. 292-305.
- Leech, G. (1983) *The principles of pragmatics*. Longman, London and New York. (池上嘉彦・河上誓作訳 (2000) 『語用論』紀伊国屋書店)

*6 そうした中で、Leech (1983) は “politeness” を、発話内行為的ゴールが対人関係上のゴール (他者と良好な対人関係を保とうという目的) と競合する、あるいは一致するときに伝えることが求められる tact (気配り) の範囲に明確に限定して使っている。

Nwoye, O.G. (1992) Linguistic politeness and socio-cultural variations of the notion of face. *Journal of Pragmatics* 18, pp. 309-328.

Tsuruta, Y. (1998) Politeness, the Japanese style: an investigation into the use of honorific forms and people's attitudes towards such use. 未公開 Ph.D. 論文 (Faculty of Humanities, University of Luton).

付録1. 調査1の質問紙

In your culture what are the last things a “polite person” would do? (as many as possible)

付録2. 調査2の質問紙

次のA欄とB欄の行動を比べて、B欄の行動のほうが「丁寧だ」と言えれば○を、言えなければ×をつけてください。例えば、「A：おぼれている人を見たとき、無視する」と「B：助ける」を比べて、『助ける方が（人道的で）良いことであるが、その良さは丁寧さとは無関係』と思ったら×をつけてください。『どちらが良いとも言えない』と思う場合も×をつけてください。『助ける方が良い。そして、その良さは丁寧さだ』と思ったら場合だけ、○をつけてください。

A	B	
例：おぼれている人を見たとき、無視する	助ける	×
人との会話の最中にあくびをする	あくびをこらえる	
試験でカンニングをする	しない	
あなたが挨拶したとき、聞こえているのに答えない	答える	
親しくない人に夜中の1時に電話する	しない	
視覚障害者のことを常に「めくら」と言ってばかにする	「目が不自由な人」と言い、ばかにしない	
初めて会った人になれなれしく話す	敬語を使って話す	
口に食べ物が入ったままでしゃべる	飲み込むまでしゃべらない	
他人の日記を勝手に読む	読まない	

友達に手伝ってもらったとき「手伝って」と言う	「悪いけどちょっと手伝って」と言う	
ケーキを勧められて一番大きいのを取る	小さいのを取る	
かげで他人の悪口を言う	言わない	
穴のあいたストッキングを穿いている	穴のあいていないのを穿いている	
渡したものをひったくように取る	静かに受け取る	
自分の子供が他人に迷惑をかけたとき、放っておく	やめさせる	
親しくない人との会話でセックスを話題にする	そういう話はしない	
人に手伝ってもらって、お礼を言わない	お礼を言う	
常に「がき」「でかい」「食う」を使う	「子供」「大きい」「食べる」を使う	
借りたカメラに傷をつけたとき、謝らない	謝る	
腹が立つと、人前でなのしることを言う	人前では感情を抑える	
駅やレジで、列に割り込む	後ろに並ぶ	
同僚に「コーヒーいれなさいよ」と言う	「コーヒーいれてくれる？」と言う	